



学校だよりNO38 令和5年 2月 3日 児童数 487人

薫っ子 II



文責 校長 古川 次男

これが、薫の底力 III

「中1ギャップ」という言葉をご存じでしょうか？

小学校の学校生活に慣れ親しんだ子どもが、中学生になった途端に苦労するということを経験して「中1ギャップ」と呼ばれているようです。そういうことが少なくなるように、小中一貫校や連携校が誕生しています。郡山市でも義務教育学校として湖南小中学校や西田学園があり、連携校として明健中学校区がその取り組みをしています。

本校でも、そのギャップを取り除くための取組を実践しています。高学年を中心に行っている一部の教科における教科担任制がそれです。

具体的に説明すると、5学年では1組担任が2クラス分の理科を受け持ち、2組担任が同じく英語と書写を受け持っています。6学年では、1組担任が3クラス分の理科を受け持ち、2組担任が同じく音楽と図工を受け持ち、3組担任も同じく英語と書写を受け持っています。さらに、5・6年ともに社会は教務主任が指導しています。中学校になると、教科によって教える先生が違ってきます。そのギャップを少なくするために、小学生のうちから教科によって先生が違う取り組みを一部の教科で行っています。

そのメリットは、得意教科を指導できる強みがあるということです。小学校の教員は、小学校の全教科を教えることを前提として免許が発行されています。ただ、大学生の時などに副免許として、中学校や高校で教えることのできる教科の免許を取る人が多くいます。それが、得意教科となるわけです。得意教科を指導できることになるので、学ぶ児童側としては深い学びを実現することができるでしょう。

また、学級担任制では一人の先生が1年間教えるわけですが、教科担任制になると一人の子どもを複数の目で見守ることができます。様々な気づきがあり、それを共有化することによって、子どもたちをよりよく育成していくことができるようです。

デメリットとしては、時間割の調整があります。また、突発的な出来事への対応が難しいという点も挙げられます。

本校では、このデメリットと言われる部分を極力少なくし、メリットを最大限に生かすことができるよう「チーム〇年」の合言葉のもとに、学年で協力しながら指導に当たっています。

複数の目で子どもたちを見守る教育は、低・中学年でも、実践されています。学年合同体育や様々な行事は、学年を単位として活動しています。メリットが子どもたちにいきわたるよう「チーム薫」で努力しているところです。



【6年2組担任による3組の授業】